



寺については、前の寸のところでお話しました。“役所”が本義です。しかし、これが部首として使われると“基準”の意味に用いられることが多いようです。

時は、“とき”の意味を表わす日と、“単位”の意味を表わす寺との会意形声字で、“ときの単位”を表わしたものです。むかしは日の動きでときを計りました。今のように、一年を通じて長さの一定したときというものは考えられませんでした。日が地平線に見えた時を“明け^む六つ”と言い、地平線に沈んだ時を“暮れ六つ”と言って、その間を、今のほぼ二時間ほどの長さで六つに分け、それを“ひととき”としました。ですから、夏と冬とでは同じ“ひととき”でも長さにかなりの違いがあったのです。名称は今の十二時が^{ここの}九つ、二時が^や八つ、四時が^{なな}七つ、六時が^む六つ、八時が^{いつ}五つ、十時が^よ四つです。二時から四時までの^や八つ時取る中食を“お八つ”と呼んで、これが今でも言葉として残っているわけです。

お寺で、日の出、日没に、六つの鐘をついて“時”を知らせたというのは、偶然ですがうまく合っていて、大変におもしろいことではありませんか。

持は、“きまり(寺)を手にもつ”という意味で、“まもる”ことを表わしています。護持。それは長く続けなければなりませんので“たもつ”意味にもなります。持続。保持。持久力。普通には、単に“手に物を持つ”の意味に多く使われます。

詩は、“きまりのある言葉”という意味の字で、文章の表現の上に、一定のきまりがあるものを言います。たとえば、漢詩のように、また和歌や俳句や新体詩のように、字数やその他表現上にそれぞれ一定の約束があるのが“詩”という字の持つ意味です。今では、字数などの上に形式的な約束を一切持たない、詩的内容だけを重んずる詩が盛んになっていますが、これでは、文字の上からは“詩”ではなくなっているわけです。

恃は、心に、一定の頼るべき基準が確立していて、心が安定していることを表わした字です。“心に頼むところがある”という意味で、“たのむ”という訓があります。同じ“たのむ”意味を持つ「怙」と合わせて「怙恃する」というように使います。また、「怙恃」を“父母”の意味に使うのは、「父無くば何をか^{たの}怙まん、母無くば何をか恃まん」という詩経の句に由来するものです。^{キョウジ}矜恃(自信と誇り)は、

よくキンジと読み誤まれて使われることばです。

等は、“竹簡(竹ふだ)をきまり良く整理する”という意味で、“順序だてる”のが本義の字です。「一等」「二等」というように、順序だてることから、“段階(等級)”の使い方が生まれました。昔、紙のない時代は、竹か木の札にうるしで字を書き、このふだをなめし皮(韋)でつなぎ合わせ、巻き物にしました。今でも、書物に一卷二巻という名前のあるのはその名残りです。孔子が熱心に読書したため、「韋編三たび絶つ^た」と言ったのは、この簡をとじた韋がたびたび巻いたり開いたりしたために切れたことを言うのです。それにしても、今の書物に比べて大変にかさばるので、整理には頭を悩ましたことでしょう。

特は、“祭礼の犠牲のために、役所(寺)に飼われている牛”という意味の字で、“犠牲用にとくべつに飼育されている牛”というのが本義です。とくべつの牛なので、今では“とくべつ”という意味に使われることの多い字です。特別。特定。特質。特権。独特。

待は、“役所(寺)に行(イ)く”という意味により、“役所に願い出て、その処置をまつ”ことを表わした字です。

役所という所は、民の声や訴えを聴く所(廳→庁)ですが、昔から無能な者が多く役人になると見えて、人を待たせたらしいですね。

なぜなら「役所(寺)に行くとかければ、“待たされる”と解ける」からです。